

日本語学習辞書開発の課題と要件について

今 井 新 悟

0. はじめに

ここ10年ほどの間に、日本語学習教材が多数出版され、また、インターネットを利用したeラーニングの教材も豊富になってきた。しかしながら、外国語・第二言語学習にもっとも必要と思われる辞書、そのなかでも日本語の学習者向けに編まれたものは、過去20年ほどの間、ほとんど増えていない。日本人用の他言語辞書は毎年のように新しいものが出版され、またオンライン辞書もあまた存在する一方で、ノンネイティブ用の日本語学習辞書の数は限られている。よりよい日本語学習辞書の開発が必要であることは明らかであるにもかかわらず、それが進まないのはなぜか。本稿では、まずその理由をこれまでに出版された言語学習用辞書を通して探る。次に日本語学習者辞書の開発における課題と、日本語学習辞書に求められる要件について考察する。そして最後に我々が現在開発中の日本語学習辞典のコンセプトと特徴について述べる。

1. 学習辞書概観：英語と日本語

英語の辞書は大変豊富である。とくに日本における英語辞書はその質・量ともに他国に類を見ない。日本における英語辞書といえば対訳辞典、つまり英和辞書と和英辞書が多い。もちろん、モノリンガル辞書である英英辞書もあるが、初期の学習者段階ではあまり用いられない。モノリンガル辞書には英語母語話者用のものもあるが、それは一般に初・中級学習者ではなく、上級者向けということになろう。英米で開発された学習者用モノリンガル英語辞書も多数ある。例えば *Merriam-Webster's Learner's Dictionary*, *Cambridge Advanced Learner's Dictionary*, *Collins Cobuild Learner's Dictionary*, *Oxford Advanced Learner's Dictionary* などが有名である。また、学習辞書編纂の歴史も古く、1953年に出版された *The Advanced Learner's Dictionary of Current English* (Hornby, Gatenby, Wakefield, 1953)^{註1)} などがある。

一方、日本語学習用の辞書についてみると、数が極めて少ない。おそらく日本で手に入る学習用辞書は5冊程度だと思われる。それぞれの国で学習辞書あるいは語彙集のようなものはいくつか出版されているようだが、それでもその数は多くはない。

では、日本語学習者は実際にどのような辞書を使っているかということ、日本人向けの日本語と各国語との対訳辞書が多い。上級者になると、日本語母語話者向けのいわゆる国語辞典を使えるようになる。なお、これらは電子辞書化されており、日本国内の学習者の多くはそれを使っている。しかし、まだ海外においてはこれらの電子辞書はあまり普及しておらず、紙媒体の辞書かあるいは電子辞書を日本の知人あるいは輸入業者などを通じて手に入れているようである。また、ハンゲル話者用のハンゲル・日本語対訳辞書や中国語母語話者用の中国語・日本

語対訳辞書はそれぞれの国で電子辞書化され、一般に流通している。

以下では、日本語学習者が使っている辞書について、使用上の課題について考える。

2. 辞書のなにかが問題か

2-1 モノリンガル辞書（国語辞典）の問題

日本語のモノリンガル辞書とはすなわち、国語辞典のことである。国語辞典を日本語学習者が用いる場合には、まずもって使用レベルが上級に限られてしまい、初級者はまったく使用できないという問題がある。特に漢字の読み方が分からない。また、本来、辞書は意味を調べるためのものであるが、一般の国語辞典を見ると、見出し語よりも語義説明のほうが難しいということが往々にしてある。おそらくそれは語義の正確さを目指した結果であろうが、語の意味が分からないから辞書を調べるという目的からすれば、本末転倒の状態である。また、国語辞典が「意味」の説明に主眼を置くところから、非母語話者にとって必要な格の情報（例えば、動詞がデ格をとるのか、二格をとるのか）などはほとんど考慮されていない。また、例文はあっても、その例文がコロケーションを意識したものであることはほとんどない。母語話者であればコロケーションは直感的に分かるが、非母語話者にはそれは分からず、それが原因で上級者になっても、文法的には間違いではないが日本語としては違和感の残る表現を使ってしまうことがある。このような点にまで言及した辞書としては『新明解国語辞典』（三省堂）があるが、それでもなお使用者として日本語母語話者を想定しているため、非母語話者にとっては不十分な内容である。子供を対象とした国語辞典では、語義の説明が難しくなりすぎないような配慮がされている。この点では、非母語話者にとっても有益であるが、一方で採録されている語彙そのものが子供向けであるため、成人日本語学習者の使用には不便が生じる。

2-2 対訳辞書の問題

日本語の対訳辞書はほとんどが日本語母語話者用に編纂されたものである。現状では、日本語学習者の多くが日本語母語話者用の対訳辞書を使用していることを先に述べた。この場合、国語辞書同様、初級者の使用には向かない。

日本以外で出版されている日本語対訳辞書もある。これらはもちろんその言語の母語話者を対象としているが、そのような辞書のほとんどが、実は日本語母語話者用辞書を底本にしている。そのため、これまで述べたように非母語話者にとって必要な情報の記述・配慮が欠けたままである。

3. 日本語学習辞書の例

日本語学習者への配慮を加えた学習辞書が何冊が存在するのでそれらの内容について見てみる。

日本語学習者にとって漢字が難関であることは論を俟たない。たとえ漢字圏の出身者であっても漢字の読み方や意味の範囲がずれるため、漢字の問題から解放されるわけではない。漢字の読み方が分からないことへの対策として、日本語母語話者向けの対訳辞書の漢字表記にルビ

を振る、あるいは表記をローマ字にするなどした辞書がある。確かにこれで表記の問題は解決されるが、語義説明がもともと日本語母語話者用のものであり、それにルビを振ったり、ローマ字表記にするだけの辞書の内容が非母語話者に適切でないことには変わらない。『ローマ字和英辞典』（講談社インターナショナル）では、ローマ字表記に加えてところどころに日本語学習者向けの説明が付け加わっている。以下に「あげる」の項の記述の一部を抜粋して示す。

ageru 上げる 《In either use of this word the recipient must not be the speaker, the speaker's group, or a person or group with whom the speaker is identifying》

① *to give* 《to someone》

¶ Haha no tanjōbi ni sētā o agemasu.

母の誕生日にセーターを上げます。

We are going to give our mother a sweater for her birthday.

¶ Kore o tomodachi ni agemashō.

これを友達に上げましょう。

I'll give this to my friend.

② *to do the favor of* 《following the gerund (-te form) of another verb》

¶ Tomodachi no shukudai o tetsudatte agemasu.

友達の宿題を手伝ってあげます。

I help my friend with her homework.

(以下略)

(Kodansha's Furigana Japanese-English Dictionaryも内容は全く同じである。ローマ字表記の部分が、ルビに変わっているだけである。)

この項目では、授受動詞(やり・もらい動詞)におけるウチ・ソトの領域による使い分けについての説明がある。しかし、この説明は学習者には分かりにくい記述になっている。また、特にここでの説明は「くれる」「もらう」との違いにも言及しながらでないと分かりづらい。さらに、例文の挙げ方も日本語学習者を意識しているとは感じられない。上記の説明からは「上げる」は自分や身内が受け手になる場合は使わないという制限があるように読み取れるが、第1の例文の受け手は「母」である。この場合は母は「相対的に」ソトになるのだが、家族は普通はウチと解釈されてしまうのではないだろうか。また、例文の提示順序も気になる。どうして、「これを友達に上げましょう」という、「あげる」の取る項がその格とともに明示化されている典型的な文を先に挙げないのだろうか。こういった学習者への配慮が欠けているように見えるのは、おそらく例文などを参照した底本となった辞書が、日本語母語話者向けの辞書だったからだろう。

『日本語学習英和辞典』（講談社インターナショナル）は、英和の学習辞典である。英和の方が辞書の執筆は大変そうである。それは、英語の方が基本的な語彙の多義性が高いからである。そのため、この辞書では英語の項目に対して（特に基本語彙において）、多数の日本語項目が羅列され、日本語項目間の関連性が感じられない。使用者にとっても使い勝手がいいとは思わ

れない。

『基礎日本語学習辞典』(国際交流基金)は日本語母語話者向けの辞書の翻案ではなく、日本語学習用に作成された辞書である。この辞書では、ページの左には日本語での説明がルビとローマ字を伴って、右には英語の説明がある。

ageru 上げる〔動Ⅱ〕

① [下から上へ移す]

¶ この荷物をたなに上げましょうか。

(Kono nimotsu o tana ni *agemeshō* ka?)

② [値段・価値・程度などを高める]

(中略)

③ [やる、与える]

結婚のお祝いを上げる

(kekkon no oiwai o *ageru*)

¶ この本をあなたに上げましょう。

(Kono hon o anata ni *agemashō*.)

¶ どれでも好きな物を上げるから、持って行きなさい。(Dore demo suki na mono o

ageru kara, motte ikinasai.)

* 「やる (*yaru*)」「与える (*ataeru*)」の謙譲語であるが、最近ではむしろ上品な言葉として使う。普通、対応または目下の人にある物を与えるときに使う。目上の人の場合も使うが、直接目上の人と言う場合は使わない。

ageru [vⅡ] **raise; give**

① [raise something]

¶ Shall I put this bag **up** on the shelf for you?

② [raise prices, value, degree, etc.]

(中略)

③ [give]

give a wedding present

¶ I'll **give** you this book.

¶ I **want you to have** which ever you like; please take it with you.

* *Ageru* is the humble form of *yaru*, *ataeru*, recently used as refined language. Usually used when giving something to someone of equal or lower status. Also used in the case of superiors but not in direct address.

日本語学習者のための辞書であるので、例文にもルビとローマ字表記の両方の補助がある。用法上の注意も有益なものであろう。また、日本語での説明をすべて英語でも繰り返し行っている。このように学習者の理解を助けるのに十分な配慮がされている。しかし、これらの手厚い配慮の結果、紙幅が増えてしまい、辞書の採録項目数が2873語と少なくなってしまっている。それゆえ、タイトルに『基礎』を付けて、扱う語彙が平易なものに限られるということを謳っているのだろう。この採録数はどの程度のレベルかという点、初級といわれる『日本語能力試験』3級では1500語程度が、2級(中級)で6000語程度が習得目標とされていることから、初級から中級の前半のレベルといえる。そして、この辞書使用の対象者としてもそのレベルを想定しているがゆえに、ルビとローマ字表記が施されている。しかし、ルビだけではなく、辞書の貴重なスペースを費やしてまで、ローマ字表記をしている意図は必ずしも明らかではない。これはルビ、すなわちひらがなが読めない人がこの辞書を使うことを想定してのことだろうか。確

かに、ローマ字表記の教科書を使って勉強した場合、あるいはまったくの生活日本語として日本語を習得した場合はそういう状況が生じるが、それは例外的ではなからうか。辞書を使用する学習者のレベルでは、漢字は読めなくともひらがなは読めるのが普通であろう。また、ルビとローマ字はすべてに施されているわけではなく、語義説明（〔 〕で示される）や用法説明にはそれが無い。それはこの部分は読めなくてもよいという前提があるからだろう。加えて、すべての項目に日本語による語義説明があるわけではない。たとえば、「あふれる」には英語で overflow という訳があるが、日本語でそれを説明していない。語義説明・用法説明を学習者に提示するのしないのか、提示する場合、それを日本語で理解させたいのかどうか、一貫性に欠ける。このような一貫性を書いた部分はそれを辞書に記述する意義が低い。この部分を英語（その他の言語）で説明するのか、日本語で説明するのか、あるいはその両者併記なのか、一貫した方針が望ましい。

『日本語を学ぶ人の辞典』（新潮社）も日本語学習者用に作成された辞書である。

あ・げる 【上げる・揚げる・挙げる】アゲル〔他動一〕①低い所から高い所に移す。

〔E〕put ~ on; fly; raise; lift. 〔国〕挙；抬；扬。〔にものつ たな あげる〕「荷物を棚に上げる/たこを空高くあげる/足をあげる/持ち上げる（→項目）〔国〕下げる、おろす

②地位、程度、値段などをこれまでより高くする。〔E〕raise; improve. 〔国〕提高；抬高；增加。「仕事の能率を上げる/ビールの値段を上げる」〔国〕下げる

③いい結果をえる。〔E〕gain; achieve; obtain. 〔国〕长进；扬（名）；取得（成果）、名を上げる/成果を上げる」

（中略）

⑥「与える」「やる」の謙讓語。〔E〕《humble》give; present. 〔国〕「给」「给予」の自謙語。「あなたにいい辞書をあげましょう」〔国〕くれる、もらう

⑦（「～てあげる」の形（かたち）で）「～てやる」の謙遜した言い方。「道を教えてあげる（〔E〕tell a person the way to ~. 〔国〕给别人告诉路线）」〔国〕くれる、もらう

（中略）

▷〔自動〕上がる・揚がる・挙がる

〔国〕漢字で書くときは「上げる」を使うことが多いが、「たこをあげる」などのばあいは「揚げる」、「式をあげる」などのばあいは「挙げる」。また、⑦⑧はひらがなで書く。

この辞書では、平易な日本語での語義説明を行っていること、それにルビを振っていること、そして、対訳を簡略的なものに留めていることから、語義説明自体を中心に据えて、それを読んで理解させようという意図が明らかに見て取れる。語義説明に比べると用例と用法説明など意味以外の学習者への情報が相対的に貧弱になってしまっていることは残念である。たとえば、⑦の「～てあげる」の例は「教える」を伴う一例のみであるが、「教える」のように方向性を持った動詞のみならず、「歌う」「走る」などの方向性を持たない動詞でも、この構文に使われることにより、方向性を付与されることが感じ取れるような例文もほしい。また、格形式についての情報を与えるために、二格の受け手を明示した例文もあった方がいい。また、⑥は文法的な

説明であるが、情報が「謙譲語」だけでは、学習者は「あげる」を正しく使うことはできない。

4. 日本語学習辞典開発の課題

質の高い英語学習辞書が多数出版されているのに対して、日本語学習辞書が少ない理由として、二つのことを挙げておきたい。それは、コーパスの不備と日本語における定義記述語彙の選定の難しさである。

辞書を作る際には、手作業でカードに用例を書き込んで溜めていくという手法がある。これに対して、近年はコーパスで用例を集めたり、コーパスを分析して、頻度を求め、これによって採録語を決定するという方法が取られるようになってきた。しかし、これができるのは、大規模なコーパスが存在する英語においてである。日本語では、英語のコーパスに匹敵する大規模コーパスはなく、現在開発が進められている国立国語研究所の言語コーパス整備計画 KOTONOHA の構築の完成を待たねばならない。よって、現状では、用例は執筆者の作例と現段階で利用可能な小規模なコーパスの併用とならざるを得ない。

十分なコーパスがないことにより、頻度による採録語の決定も実現できない。学習辞書における採録語は、執筆者の勘あるいは『日本語能力出題基準』に採録された8000語強の語彙を参照することが多いと思われる。しかし、この『基準』そのものが複数の日本語教科書の調査から帰納的に選び出されたものが中心となっていることから、その根本は教科書作成者、すなわち日本語教師の勘に帰着してしまうものである。

コーパスの不備は用例の収集も困難にする。辞書に採録する例文には教育的配慮が加えられることは当然のこととして排除はしないが、それだけでは片手落ちである。コーパスで頻度の高い用例を参照しながら辞書に記述する用例を決めたい。なお、これはボトムアップ式の用法基盤モデルを唱える認知言語学のアプローチにも通じる方法である。認知言語学では構文が意味を決定するという考え方があがるが、その考えを取り入れて辞書の用例を決めていくには用例頻度の分かるコーパスが必要になる。

定義記述語彙とは、辞書の説明に用いるための語彙で、ある一定数に制限されたものである。例えば、Longmanの学習辞書では、定義記述語彙2000語を定めており、すべての説明がこれでされるため、学習者はこの2000語を覚えておけば辞書が自由に使いこなせることになる。同様に、*Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*では2500語、*Oxford Advanced learner's Dictionary*では3000語の定義記述語彙を定めている。これらもやはり、コーパスの頻度を拠り所とし、さらに各語の中心的な意味に限定して使われている。このような研究は *The Interim Report on Vocabulary Selection* (Faucett, West, Parmer, and Thorndike 1936)^(註2) や *Teacher's Word Book of 30,000 Words* (Thorndike and Lorge) に既に見られる。

日本語の辞書にはまだこのような定義記述語彙の方法が導入されたものはない。この定義記述語彙の概念に近いものとして、基礎語彙・基本語彙がある。基礎語彙は人為的に選定した語彙の集合であり、基本語彙は使用頻度の高い語彙の集合である。

基礎語彙については、古くは土井光知(1933/1943)が「できる限り単純な、しかし何事でもはっきり言ひ表し得る、整理された、また記憶することがたやすい、基礎となるべき日本語を組織する」として、基礎語彙1100語(「聞く」が重複しているため1099語)を選定している。

これで選定された語彙の約75%は名詞であり、これは定義記述語彙として使えるものではない。他にもいくつかあるが^{註3)}、玉村文郎(1987)「日本語教育基本語彙2570語」がある。これはタイトルが「基本語彙」になっているが、前述の基礎語彙・基本語彙の定義に照らせば、基礎語彙と呼ぶべきものである。玉村(1987)は定義記述語彙として使えそうであるが、後述するように、さらに検討の余地がある。また、先述の『日本語能力試験出題基準』も基礎語彙ということになる。『基準』は8000語以上の語彙を収録しているので、これも定義記述語彙とは性格を異にする。他に、簡約日本語として1000語程度を選定するという試みがあった(野元菊雄1979, 1985)が、これは定義を試みようとするものではなく、初級レベルでの使用数そのものを制限しようという試みであり、これも定義記述語彙とは性格が異なる。

さて、日本語および他言語の基本語彙数を比較した次のような表がある。

表1. 基本語彙数

語数(上位)	フランス語	英語	中国語	日本語
1000語	83.5%	80.5%	76.5%	60.5%
2000語	89.4%	86.6%	-	70.0%
3000語	92.8%	90.0%	-	75.3%
5000語	96.0%	93.5%	-	81.7%

国立国語研究所(1984)『語彙の研究と研究(上)』大蔵省印刷局

この表は、たとえば英語では基本語彙2000語で通常の使用言語の86.6%をカバーするというものである。(モスクワ国立言語研究所の調査。南博(1961)に引用)フランス語・英語では、基本語彙3000語があれば、ほぼ90%以上をカバーする。それに対して、日本語(国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字(1)一総記および語彙表一』)では、3000語でも75%程度しかカバーできない。日本語の上位10,000語で91.7%のカバー率になる(国立国語研究所1984:102)。以上の結果から、日本語はこれらの言語に比べて、定義記述語彙の策定をしようとすると、より多くの語彙を必要とする。しかし、定義記述語彙はその数を制限して、学習者の負担を軽減しようとするものであるので、安易に語彙数を増やしては所期の目的と相容れないことになる。先にみた玉村(1987)では、2570語を提案していたが、この数では、定義記述語彙としては不十分かもしれない。

5. 日本語学習辞典の要件

以下では、これからの日本語学習辞典に求められる要件について提案を行いたい。

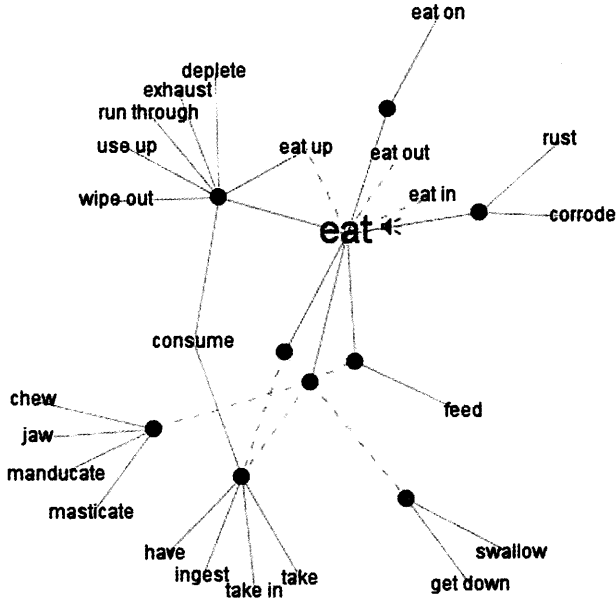
現在の日本語能力試験の『基準』にある語彙数が8000語強であること、基本語彙10,000語でおよそ90%のカバー率であること(上掲表参照)を鑑みれば、採録すべき見出し語彙数は10,000語が目安になる。もちろん、学習辞書でも国語辞典なみの数万語を収録できればなおよい。

定義記述語彙は2000語を提案したい。すでに述べた通り、2000語のカバー率は他言語に比べて劣るのであるが、これ以上定義記述語彙を増やすことは、学習者への負担を考えれば無理で

ある。2000語の選定を慎重に行い、記述の効率を高めることによりカバー率の低さを補うほかない。そのためには、頻度による基本語彙を参考としながらも、記述力の高い語を優先的に選定していくという方法がよい。これは基礎語彙の概念とも異なるもので、定義記述の効率による選定である。おそらく、これにはアプリアリな基準は求められず、辞書記述の試行錯誤を繰り返すことによって固まっていくものと思われる。

意味の記述は、単なる羅列に陥ることなく、それぞれの展開義が基本義を中心としてどのように展開しているのか、その脈略が分かるように提示すべきである。ネイティブスピーカーには「なんとなく分かる」という意味や意味の繋がりが非ネイティブには感じ取ることが困難である。よって、認知言語学でいうところのスキーマを言語化して説明する必要がある。

文法・用法上の情報は必須である。たとえば、シンタグマティックなものとして各々の動詞はどのような格を取るのか、意味的な選択制限はなにか（有性物・無生物など）、コロケーションとしてどのようなものが使われるのかという情報が必要である。また、コロケーション関係の自然さの程度をコーパスに基づく頻度によって示すことができればなおよい。また、パラダイグマティックな関係をネットワーク化して示すことができれば、学習者の語彙の広さを拡張するのに有効である。このネットワークには狭い意味での類義語・対義語に留まらず、より広く、その語に関係があり、その語から連想される語が含まれる。このようなネットワークの例としてVisual Thesaurusのeatの例を下に示す。



豊富な用例も必要である。例えば『日本国語大辞典』では用例は歴史的に初出のものを挙げるのが基本となっている。これは用例の使い方を歴史的に知るには有益である。それに対して、学習辞典の用例は、ちょうど教室で日本語を学ぶときと同じように、用例から帰納的に意味・用法を推測・確認するためにある。これは、認知言語学的な立場から言えば、用例からスキーマを抽出する作業を期待することである。そのためにはプロトタイプおよびそれに近い用例が複数あることが必要である。

他に、発音・アクセント情報も必要になる。これは、電子辞書やWEB辞書では実際の音声として提供できる。また、手書きパッドを使って、読み方の分からない語でも検索できるようにすることで学習辞書として実用性を高めることができる。

6. まとめに代えて

筆者は現在、3種類の日本語学習辞典の開発に携わっている。そのいずれもまだ完成を見ておらず、企画段階のものもあるため、それぞれの辞書が今後どのような形となって現れてくるのかは未知である。ここでは、その中でもっとも開発が進んでいる『日本語学習辞典 Japanese Learner's Dictionary』についてのみ、触れておきたい。これは過去数年に亘って開発を続け、未完成ながらWEB上で公開している。採録語は約10,000語であり、『日本語能力試験出題基準』にある語はすべて網羅し、さらに学習者に必要と思われる語を追加している。ただし、その基準は恣意的であることは否めない。この辞書では、日本語による語義説明を行っていない。定義記述語彙の設定が困難であることから、現段階では英語による対訳辞書にしている。定義記述語彙での記述が学習辞書の本来のあり方であることは明らかであるので、将来の課題としている。ひらがな、漢字、ローマ字で検索できる。また、英語からも検索できるので、擬似的ながら英和辞書的にも使うことができる。用例は日本語学習用に、動詞の各成分とコロケーションをできるだけ取り込んでいる。ただし、それを説明することはせず、帰納的に分かるような例文を挙げている。例文は中心的な意義・用法から周辺の意義・用法へと順番に展開するようになっている。すべての例文が自動で音声読み上げされるようになっており、例文の読み方にルビを振らずとも読み方が分かるようになっている。ただし、自動音声であるため、イントネーションに若干の不自然さが残っており、これは自動音声読み上げエンジンの今後の発展に従って将来にわたって改良されていくことになる。各見出し語の理解を助けるための写真・イラストを準備している。現在は、インターネットを自動的に検索して当該語に関連する写真・イラストを提示する仕組みになっている。この方法では必ずしも語と写真・イラストの関係が明らかでないものが多く、早い時期に、自動検索をやめて、理解の助けになるオリジナルの写真・イラストと見出し語の関連づけを実現したい。

筆者が関わっている他の辞書はいずれも認知言語学的アプローチをとっており、あらたな辞書開発の試みとなる。

期せずして、同時に3種類の学習辞書開発に係わることになったが、それはとりもなおさず、新たな学習辞書が必要であることと、いまだ満足のいく学習辞書がないという認識を日本語教育関係者が共有していたことの証である。また、複数の学習辞書が開発されているのは、求められる学習辞書の形が必ずしも一つではないことを示している。本稿で論じたように、日本語

の学習辞書の開発には多くの課題が立ちはだかっていることを覚悟の上で、今後、多くの日本語学習辞書が編まれることを期待したい。

【注】

注1) および注2) 奥村(2009)による。

注3) 大塚薫(2009)「外国人児童・生徒に対する基本語彙考」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』第3号を参照。

【参考文献】

- 土井光知(1933/1943)『日本語の姿』改造社
- Imai, shingo, A. Yamaguchi, and T. Hiramaura (2009)『日本語学習辞典 Japanese Learner's Dictionary』<http://www.nihongo123.com>
- 国立国語研究所(1984)『語彙の研究と研究(上)』大蔵省印刷局
- 国立国語研究所(2006)言語コーパス整備計画 <http://www.kokken.go.jp/kotonoha/>
- 国際交流基金(1986)『基礎日本語学習辞典 The Japan Foundation Basic Japanese-English Dictionary』凡人社(他、各国語版多数)
- 国際交流基金・日本国際教育支援協会編(2007)『日本語能力出題基準(改訂版)』凡人社
- 南博(1961)『記憶術』光文社
- Martin, E. Samuel (1994) *Martin's Concise Japanese Dictionary: English-Japanese, Japanese-English: fully Romanized with complete kanji & Kana*. Charles E. Tuttle.
- 野元菊雄(1979)「簡約日本語のすすめ—日本語が世界語になるために」『言語』pp.8-3.
- 野元菊雄(1985)「日本語教育と簡約日本語」文化庁月報199
- Noro, T. and T. Tokuda (2008) 'Ranking words for building a Japanese defining vocabulary.' The 3rd International Joint Conference on Natural Language Processing, Hyderabad, India, pp.679-684.
- 奥村圭子(2009)「日本語教育と留学生教育—イギリスの大学教育から学ぶ—」宇都宮大学留学生センター・茨城大学留学生センターシンポジウム発表資料
- 大塚薫(2009)「外国人児童・生徒に対する基本語彙考」参照『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』第3号pp.69-81.
- 阪田雪子監修・遠藤織枝編集主幹・にほんごの会編集(1995)『日本語を学ぶ人の辞典 Informative Japanese Dictionary 易懂日語詞典 英語・中国語訳付き』新潮社
- Sharpe, Peter (2006)『日本語学習英和辞典 Kodansha's Communicative English-Japanese Dictionary』講談社インターナショナル
- 小学館国語辞典編集部(1972-2002)『日本国語大辞典』小学館
- 玉村文郎(1987)「日本語教育基本語彙2570語」アルク日本語教師養成通信講座『日本語の語彙・意味(2)』アルク
- Thinkmap(2009) Visual Thesaurus version 3 <http://www.visualthesaurus.com>
- 吉田正俊・中村義勝編(1995/2001)『ふりがな和英辞典 Kodansha's Furigana Japanese-

(21)

English Dictionary』講談社インターナショナル

吉田正俊・中村義勝編 (1996) 『ふりがな英和辞典 Kodansha's Furigana English-Japanese Dictionary』講談社インターナショナル

吉田正俊・中村義勝編 (1999) 『ふりがな和英・英和辞典 Kodansha's Furigana Japanese Dictionary』講談社インターナショナル

Vance, J. Timothy (1993/2001) 『ローマ字和英辞典 Kodansha's Romanized Japanese-English Dictionary』講談社インターナショナル

(いまい・しんご)